

られたるを喜び、而かも拍手夫人を賛嘆するものは何ぞや、夫人の崇高なるに感じたればなり、夫人の凜烈たるに威伏したればなり

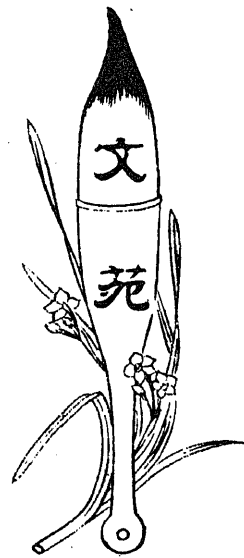
讀者よ想ひ見よ、必らず夫人を罪科に陥れんとする豫期を以て審問し傍聴せる反對黨人……狂亂せる而かも一點の涙なき鬼の如き石の如き……をして心ならずも無罪を宣告せしめ、吾れ知らず拍手せしむるに至りしといふ夫人の風采が如何に崇高なりしかを又如何に其の意氣凜烈たりしかを、夫人拍手を背に聽なし悠然一揖して院を去る、ロペスピアー目送して曰

大なる哉

萌え出るも枯るゝもおなじ野邊の草  
いつれか秋に遇はではつべき

新 樹

中嶋 歌子



梢みな若葉になれる庭のおもに

また色あせぬわか楓かな

寄 山 祝

同 人

高砂の嶋山とほく日のみ旗

かゝやく御代になりにける哉

夏 蝶

徳大寺治子

若葉のみしけるかけをそこはかと

なにゝうかれて蝶のとふらん

花間競争舟

田中みの子

敷嶋の大和こゝろもみゆるかな

はなの木かけをさそふ小舟に

夏植物

同・人

もろともになすゝまむ人はなけれども

うゑてやみまし花の夕かほ

巡査

天野瀧子

更るよも絶えずひゝかすくつ音に

やすくねらるゝみよぞうれしき

竹亭夏月

佐藤つや子

わか宿の竹の葉末におくつゆを

折ゝみする月のかけかな

新樹風

中村禮子

折ゝに露もこほれてかへるての

かぜこゝちよき朝ぼらけ哉

夢後子規

中村禮子

子規をちかへりなくこゑすなり

ゆめに聞しもまことなりけん

深山新樹

木原庫子

くらきまで若葉茂りて奥山の

瀧はおとのみ聞えけるかな

蚊遣火

箕作光子

夏しらぬわか山まとも蚊遣火の

けふりいふせき夕まくれかな

月前子規

關藤子

さやかなる月の光にあくかれて

子規さへなくよなりけり

同

竹屋つね子

まかねちをはしる車のおと絶て

更行月になくほとゝさす

文

國 旗

竹屋つね子

軒ことにかゝけていはふ日の御旗

くもらぬみよのしるしなるらむ

首夏風

増野やす子

昨日けふ庭のわか葉を吹きわたる

かせ心地よき夏はきにけり

納 涼

篠原みやの

夕月のかけは田のものにうつろひて

たもと涼しき川風ぞふく

ころも

池袋すが

たらちねの心つくしの新衣

あやにしきよりたふとかりけり

時 鳥

工藤しけ

ねやの戸に一聲もらすほとゝぎす

なれの夢にも秋やむすべる

時 鳥

寺島とく

うの花のにはふ垣根にほとゝぎす

一聲高くなのりけるかな

月前郭公

山川いく子

夕月のかけなつかしき木かくれに

一聲なる時鳥かな

同

鎌田さく

ほとゝぎすなきつる空は雲消えて

まきの板戸に月をさし入る

初夏山

館 つね

八重櫻ちりにし山にうの花は

今をさかりとさきこほれけり

軒若竹

窪田八重

露にぬれて雀の雛の遊ふなり

しつかのさばの若竹の上に

苑

郭 公

松宮ゆた

まつとしも今日はなけれどほととぎす

野にも山にも鳴き渡るかな

夏 草

森岡たけ子

野はなへてふみわけかたくなりけり

すゝき高かやしけりわひつゝ

晝 顔

槻尾董子

てりつゝき山田の水のみなつきに

露を含みてゑめるひる顔

夏 草

林 節子

朝なくおく白露のすゝしさに

かりもはらはぬ庭の夏草

いかなる折にか

池田みぎは

若葉しけるなかに家あり世の中の

あつけさしらして誰かすむらん

無 題

秋

影

妻とらば琴ひくをとめ家買は、

銀杏ある家をとのぞましと思ふ

納 涼

東 くめ

晝間の暑さの

なごり見せて、

炎そもえたつ

ゆふべの雲に、

くれなぬそめなす

いる日のかけ、

波間に落つるや

おさも暮れぬ、

\* \* \* \* \*

熾けたる真砂路

いつか冷えて

夕風すゝしく

渡る磯を

ものすそかゝけて

友とゆけば

よせくる白波

足をおそふ

\* \* \* \* \*